

## 【研究ノート】

## 訳注『論語逢原』（1）

久米裕子

**要旨** 本稿は、中井履軒『論語逢原』の訳注である。中井履軒（一七三二～一八一七）は、懷徳堂学派を代表する人物であり、特にその膨大な経学研究によって知られ、中でも『論語逢原』は、履軒の最もすぐれた注釈書の一つとされる。履軒の『論語』解釈の原点は、朱子『論語集注』にあるが、履軒は朱子の解釈にしばられることなく、むしろこれを批判的に継承し、独自の解釈を展開している。本稿は、この点をふまえ、朱子の説と履軒の説を対比させるため、『論語逢原』には挙げられていない朱子の注解を本文中に逐一挿入してみた。今回訳出したのは、『論語逢原』の冒頭の序文部分であるが、『論語』の本文ならびに朱子の注解については、すでに数多くの先行研究があるので、これらについては、その書き下し文を記すだけに止めた。また、参考のため、巻末に『論語逢原』の原文を付した。

（キーワード）懷徳堂、中井履軒、論語逢原、朱子、論語集注

## 〈凡例〉

- 一、『論語逢原』のテキストは、関儀一郎編『日本名家四書注釈全書』（東洋図書刊行会、大正一四年）を底本とした。以下「日本名家本」と略記する。また、懷徳堂文庫が所蔵する中井履軒手稿の『論語逢原』を適宜、参照した。以下「手稿本」と略記する。
- 一、『論語集注』のテキストは、朱熹撰『四書章句集注』（中華書局、新編諸子集成第一輯、一九八三年）を底本とした。以下「中華書局本」と略記する。なお、朱子の注解は、『論語逢原』の原文と区別するため、すべて小字で記し、【 】内に収めた。
- 一、訓読は、日本名家本の訓点に従い、履軒の「水哉館読法」を採用した。そこで、一般的な訓読法と異なる箇所には、傍らに「ママ」と付した。なお、本稿では、すべて常用漢字ならびに現代かなづかいを採用している。
- 一、履軒の注解については、書き下し文の後に現代語訳を小字で付した。また、訳出に際しては、分かりやすさを優先させ、原文にはない言葉をかなり補って訳した。

## 『論語逢原』

## 「集註序説」

水哉館学

『史記』の「世家」に曰く、孔子名は丘、字は仲尼、其の先は宋人なり。父は叔梁紇、母は顔氏、魯の襄公二十二年、庚戌の歳、十一月庚子を以て、孔子を魯の昌平郷陬邑に生めり。児為りしとき嬉戯するに、常に俎豆を陳ね、礼容を設く。

朱子甚しくは『史記』を信ぜず。姑く記載して以て考に備うるのみ。

朱子は非常に『史記』を信じていたというわけではない。ひとまず書きとめて参考のために置いておくだけである。

此の節に、曰く「顔氏」と、曰く「十一月庚子」と、曰く「俎豆を陳ね、礼容を設く」と、皆後人の附益量度にして、其の実明徴無く、拠るに足らざる者なり。他多く此に放う。

此の節に、朱子は『史記』「孔子世家」等から文章を引用して「孔子の母親の姓は顔氏であった」、「孔子は十一月庚子の日に生まれた」、「孔子は子どもの頃、俎豆を並べ、恭しく振舞って遊んでいた」と言うが、これらは全て後人の付足しや憶測であり、実際には明らかな証拠はな

「く、根拠とするに足らないものである。以下これに倣う。

長ずるに及び委吏と為る。料量平らかなり。【「委吏」、本「季氏史」に作る。『素隠』に云う、一本「委吏」に作ると。『孟子』と合すれば、今之に従う。】司職の吏と為る。畜蕃息す。【「職」、「周礼」「牛人」に見ゆ。讀みて「職」と為す。義「牝(くい)」と同じ。蓋し犠牲を繫養するの所なり。此の官は即ち「孟子」(万章下篇)の所謂「粟田」なり。】周に適き礼を老子に問う。既に反り而して弟子益ます進む。

「礼を問う」は、是れ老学家の虚誕なり。宜しく削去すべし。

「礼について老子に尋ねた」という話しは、俗学者のでっちあげである。この話しは削除したほうがよい。

昭公二十五年甲申、孔子年三十五。而して昭公齊に奔り、魯乱る。是に於て齊に適き、高昭子の家臣と為り、以て景公に通ず。【「詔を聞く」(『論語』「述而篇」)、「政を問う」(『論語』「顔淵篇」)の二事有り。】公封ずるに尼谿の田を以てせんと欲す。晏嬰可かず。公之に感う。【「季・孟」、「吾老いたり」(『論語』「微子篇」)の語有り。】孔子遂に行き、魯に反る。

「家臣と為る」も徴なし。蓋し虚伝と云う。

「高昭子の家臣になった」とあるが証拠はない。思うにこれも根拠のない噂話というわけである。

「尼谿の封」は、『墨子』に出ず<sup>(2)</sup>。其の言皆深く孔子を誣誣す。白公の謀に与り、奉ずるに石乞を以てし、田常の逆を助け、三國を乱すと言うに至りては、此れ論ずる勿く孔子を誣い、亦厚く晏子を誣う。『孔叢子』「詰墨篇」に、此の二事を弁す。頗る明白なり。且つ云う、白公乱を作すは、哀公十六年の秋に在り。孔子卒して已に十旬なりと<sup>(3)</sup>。『史記』は蓋し『墨子』に本づくなり。宜しく削去すべし。

「景公が孔子に尼谿の地を封じようとした」という話は、『墨子』「非儒下篇」に出典がある。『墨子』の言葉はどれも孔子を無実の罪によって譏っている。白公の計略に荷担して、白公に石乞を推挙し、田常の反乱を助けて、楚・斉・呉の三國を乱したと言うに至っては、論じるまでもなく、孔子を誣謗しているが、これはまた同時に晏子に対しても、してもいいない発言をしたかのようにして、誣謗していることになっている。『孔叢子』「詰墨篇」は、白公と田常に関するこの二つの事件について論じている。その議論はたいへん明瞭で、かつ「白公が反乱を起こしたのは、哀公十六年の秋のことで、これは孔子が亡くなってからすでに百日経っている」と言っている。思うに『史記』は『墨子』に基づいている。この話は削除したほうがよい。

『史記』『論語』の文を節摘し、篇中に排布するも、蓋し皆臆断

なり。考うる所有るに非ず。故に往往にして次を失す。亦弁するに足らず。

『史記』は『論語』の文を適當につまみとり、「孔子世家」の中にしきならべている。思うにこれらはすべて憶測である。何か根拠があったわけではない。したがって『史記』「孔子世家」は往々にしてその時間排列を誤っている。これも議論するに足らない。

定公元年壬辰、孔子年四十三、季氏強僭<sup>(4)</sup>。其の臣陽虎乱を作し政を専にす。故に孔子仕えず、而して退きて詩書礼楽を脩む。弟子弥いよ衆し。

『詩』・『書』・『礼』・『楽』を講明するは、是れ孔子の恒事なるのみ。此に特に「脩む」と称するは、臆度にして拠るに足らず。史遷の意、蓋し退き而して学を講ずるを謂うのみ。泥む勿かれ。『詩』を刪り楽を正すと相い礙ぐるを得ず。

『詩』・『書』・『礼』・『楽』を研究するというのは、孔子が常日頌行なっていたことである。ここで特に『詩』・『書』・『礼』・『楽』を修めた」と言うのは憶測であり根拠とするに足らない。司馬遷の意図は、思うに孔子が政界を退いて研究していたことを言おうとしているだけである。こたわってはいけない。ここで『詩』・『書』・『礼』・『楽』を修めた」と言っていることと、この後に『詩』を刪り、『楽』を正すと「言っていることは、特に矛盾することではない。」

上文に云う、「弟子益ます進む」と。此に又云う、「弥いよ衆し」と。並びに是れ臆度にして、証左無し。

前文に「弟子が益々増えた」と言い、ここにさらに「弟子がいよいよ多くなつた」と言う。これはどちらも憶測であつて、証拠はない。

九年庚子、孔子年五十一、公山弗擾、費を以て季氏に畔く。孔子を召す。往かんと欲し而して卒に行かず。【子路に答うる「東周」(論語)「陽貨篇」の語有り。】定公孔子を以て中都の宰と為す。一年にして四方之に則り、遂に司空と為り、又大司寇と為る。

『戴記』を按ずるに、「夫子中都に制す」の文有り。然れども未だ以て証とするに足らず。且つ既に「宰」と云う。是れ家臣なり。公臣に非ず。上下の文相い属かず。或は是れ虚伝ならん。

『礼記』「檀弓上篇」に拠れば、「孔子は中都の宰となつて諸制度を定めた」という文がある。しかしまだ証拠とするには不十分である。かつここでは「宰」と言っている以上、孔子は家臣であり、定公直属の公臣ではない。これでは上下の文がつかない。ひよつとするとこれは根拠のない噂話であるかもしれない。

十年辛丑、定公を相けて、齊侯に夾谷に会す。齊人魯に侵地を帰す。十二年癸卯、仲由に季氏の宰為らしめ、三都を墮ち、其の甲兵を収む。孟氏肯て成を墮たず。之を囲む。克たず。

『春秋伝』・「年表」・「魯世家」を按ずるに、「郈を墮つ」・「費を墮つ」は、孔子行くの前に在り。而して「成を囲む」は、孔子行くの後十二月に在れば、則ち此の文謬れるのみ。

『春秋』および『史記』の「年表」と「魯世家」に拠れば、「郈の町を壊し」費の町を壊したのは、孔子が魯の国を去る前のことである。そして「定公が成の町を囲んだ」のは、孔子が魯の国を去つた後の十二月のことなので、『史記』「孔子世家」のこの文は間違っている。

十四年乙巳、孔子年五十六、相の事を撰行し、少正卯を誅し、国政を与り聞く。三月にして魯国大いに治まる。

「夾谷の会」にて、孔子嘗て相為り。是れ会礼を輔相するのみ。後人因りて宰相の「相」と作し、以て誣うるなり。朱子曰く、「少正卯」の事、『論語』載せず、思・孟言わず、『春秋内外伝』の誣いて駁するを以てしても、猶お道わざるなり。独り荀卿のみ之を言う。蓋し齊・魯の陋儒、聖人の職を失うに憤り、故に此の説を為し、以て其の権を夸るのみと。

「夾谷の会」において、孔子はかつて「相」の役を務めた。この時、孔子は会合の儀式を「輔相(補佐)」しただけである。後人はこれを宰相の「相」として、こじつけたのである。朱子は次のように述べている。「孔子が宰相になって少正卯を誅殺した」という事について、『論語』にも記載されていないし、子思や孟子も言及しておらず、『春秋左氏伝』

や『国語』のこじつけによって非難する文章を持出してきても、やはり言われていない。ただ荀子だけがこの事について言及している。思うに齊の国か魯の国あたりの見識の狭い儒者が、聖人である孔子がこの後、職を失って魯国を去ることに憤ったため、この説を作って、その当時の孔子の権勢を誇張しただけであると。

齊人女楽を帰り、以て之を沮む。季桓子之を受く。郊して又膳俎を大夫に致さず。孔子行く。【魯世家】此れ以上を以て皆十二年の事と為す。衛に適き、子路の妻の兄顔濁鄒の家を主とす。【孟子】「顔讎田」【孟子】「万章上篇」に作る。【陳に適き、匡を過ぐ。匡人以て陽虎と為し而して之を拘う。】「顔淵後る」【論語】「先進篇」及び「文王既に没す」【論語】「子罕篇」の語有り。【既に解かれて衛に還り、蘧伯玉の家を主とす。南子を見る。】「子路に矢う」【論語】「雍也篇」及び「未だ徳を好む者を見ず」【論語】「子罕篇」・「衛靈公篇」の語有り。【去りて宋に適く。司馬桓魋之を殺さんと欲す。】「天徳を生ず」【論語】「述而篇」の語及び「微服して宋を過ぐ」【孟子】「万章上篇」の事有り。【又去りて陳に適き、司城貞子の家を主とす。居ること三歳。而して衛に反る。靈公用うることを能わず。】「三年にして成ること有らん」【論語】「子路篇」の語有り。【晋の趙氏の家臣佛肸、中牟を以て畔く。孔子を召す。往かんと欲し亦果さず。】「子路に答うる」「堅白」【論語】「陽貨篇」の語及び「糞を荷いて門を過ぐ」【論語】「憲問篇」の事有り。【將に西して趙簡子を見んとす。河に至り而して反る。

『史記』、「河に至り而して反る」は、鳴犢の事を以てす。此れ蓋し鳴犢の虚誕なるを意い、而して載せざるなり。然らば「河に至る」も、亦之を削り而して可ならん。

『史記』は、「孔子が黄河に至って引き返した」のは、鳴犢が趙簡子に殺された事を理由としている。これについて思うに朱子は鳴犢の事を「うちあげではないかと疑い、『論語序説』に記載しなかったであろう。そうであるならば『黄河に至って云々』の記載についても、これを削除してさしつかえないであろう。

又蘧伯玉の家を主とす。靈公陳を問う、対えず而して行く。復陳に如く。【論語】（衛靈公篇）に拠れば則ち「糧を絶つ」は当に此の時に在るべし。季桓子卒す。遺言して康子に謂う、必ず孔子を召せと。其の臣之を止む。康子乃ち再求を召す。【史記】『論語』の「帰らんか」【公治長篇】の歎を以て此の時に在ると為し、又『孟子』【尽心下篇】記す所の歎辞を以て司城貞子を主とするの時の語と為す。疑うらくは然らず。蓋し『語』・『孟』記す所、本皆此の一時の語、而して記す所に異同有るのみ。】孔子蔡及び葉に如く。【葉公の問答】『論語』「子路篇」、「子路対えず」【論語】「述而篇」、「沮・溺耦して耕す」【論語】「微子篇」、「篠を荷う丈人」【論語】「微子篇」等の事有り。【史記】云えらく、是に於いて楚の昭王人をして孔子を聘せしむ。孔子將に往きて拜礼せんとす。而して陳・蔡の大夫徒を發して之を困む。故に孔子糧を陳・蔡の間に絶つと。「愠って見ゆ」【論語】「衛靈公篇」及び子貢に告ぐる「一貫」の語有り。按ずるに是の時陳・蔡楚に臣服す。若し楚王孔子を來聘せば、陳・蔡の大夫安くんぞ敢て之

を囲まん。且つ『論語』に拠れば「糧を絶つ」は当に「衛を去り陳に如く」の時に在るべし。】楚の昭王将に書社の地を以て孔子を封ぜんとす。令尹子西可かず。乃ち止む。【『史記』に云う、書社の地七百里と。恐らくは此の理無し。時に則ち「接輿の歌」(『論語』「微子篇」)有り。】

諸書を按ずるに、孔子の足跡、未だ嘗て楚に至らざるなり。「書社の封」、虚誕なるのみ。

諸資料を参照したところ、孔子の足跡は、いまだかつて楚の国に至っていない。したがって「楚の昭王が書社の地を以て孔子を封じた」というのも、でっちあげである。

「書社の地を以て封ず」は、是れ語を成さず。亦節略の宜を失う者なり。「書社」とは里居の良き者を称するなり。乃ち承くるに里数を以てすれば、纒に文理を成すのみ。「七百」とは是れ書社の里の数なり。「方七百里」の謂いに非ず。註に「此の理無し」とは、殆ど以て「方七百里」と為せばなり。「七百里」は、大抵万有六七千戸なり。其の田周制を以て之を推し、一里ごとに三井を給えば、二千一百井と為る。大抵二十成の田なるのみ。太だ多き者に非ず。僅に方七百里の七百分之二に居ると云う。然れども事已に虚誕なれば、実に弁ずるに足らざる者なり。

朱子は「書社の地を以て封じた」というが、これは文章として成り立たない。これもまた朱子が『史記』「孔子世家」の文章を節録した結果、

本来の意味を失っているケースである。「書社」とは肥沃なむらざとという意味であり、「書社」という語を里数で承けて、ようやく文章が通る。「七百」とは、これは書社を数える里という行政区画の数のことで、七百里四方という意味ではない。朱子の注に「七百里というのはおかしい」とあるのは、おそらく朱子が七百里四方では広すぎると考えたからである。七百里はおよそ一万六、七千戸となる。その広さは周代の制度(井田法)から推し量るに、一里ごとに三井の土地が与えられるので、「七百里」では、二千百井になる。これはおよそ二十成の広さの土地にしかない。広すぎるといふことではない。わずかに七百里四方の七百分の一に相当するというわけである。しかし「楚の昭王から封じられた」という事自体、すでにでっちあげである以上、「七百里」が意味する内容については、全く議論する必要がない。

又衛に反る。時に靈公已に卒す。衛君輒ち孔子を得て政を為さんと欲す。【魯・衛は兄弟なり】(『論語』「子路篇」)及び子貢の「夷・齊」(『論語』「述而篇」)、子路の「正名」(『論語』「子路篇」)に答うるの語有り。而して冉求季氏の将と為り、齊と戦いて功有り。康子乃ち孔子を召す。而して孔子魯に帰る。実に哀公の十一年丁巳。而して孔子年六十八。【哀公】及び「康子」に対するの語有り(『論語』「為政篇」・「顔淵篇」)。然るに魯終に孔子を用うること能わず。孔子も亦仕を求めず。乃ち『書伝』・「礼記」を叙で、【杞・宋】(『論語』「八佾篇」)、【損益】(『論語』「為政篇」)、「周に従わん」(『論語』「八佾篇」)等の語有り。【『詩』を刪り樂を正し、【『大師に語ぐ』(『論語』「八佾篇」)及び「樂正し」(『論語』「子罕篇」)の語有り。【『易』の「象」・「繫」・「象」・「説卦」・「文言」を序

ず。【「我に数年を假う」(『論語』「述而篇」)の語有り。】

「十翼伝」は皆孔子の筆に非ず。「序」は字の誤りなり。

「十翼」はすべて孔子の書いたものではない。『易』の「彖伝」・「繫辞伝」・「象伝」・「説卦伝」・「文言伝」を「序ず」とあるが、「序」の字は誤りである。

弟子蓋し三千、身六芸に通ずる者、七十二人。【弟子顔回最も賢なれど、蚤くに死し、後に惟だ曾參のみ孔子の道を伝うるを得】

「三千」は太汎を失す。「七十二」は太切を失す。並びに伝説の実を得ざる者なり。泥む勿かれ。

弟子の数が「三千人」というのは、あまりにも漠然としていて数が多すぎる点がおかしい。一方、「七十二人」というのは、あまりにも厳密で数が少なすぎる点がおかしい。どちらも伝説で真実を伝えるものではない。したがってこの数にこだわってはいけない。

十四年庚申、魯西の狩に麟を獲たり。【「我を知る莫し」(『論語』「憲問篇」)の數有り。】孔子『春秋』を作る。【「我を知り、我を罪す」(『孟子』滕文公下篇)等の語有り。『論語』(「憲問篇」)の「陳恒を討つを請う」の事も亦是の年に在り。】

麟に祇祥無し。尤も『春秋』と干係無し。此れ『春秋伝』の説を用うるなり。従うべからず。

麟に災いのきざしは無い。特に『春秋』の成立とは無関係である。朱子「論語序説」は『春秋伝』の説を採用しているのである。この説に従ってはならない。

明年辛酉、子路衛に死す。十六年壬戌、四月己丑、孔子卒す。年七十。魯の城北泗上に葬る。弟子皆心喪を服すること三年而して去る。惟だ子貢冢上に廬すること、凡そ六年。孔子鯉を生む。字は伯魚。先ず卒す。伯魚偁を生む。字は子思。『中庸』を作る。【子思曾子に学び、而して孟子業を子思の門人に受く。】

何氏曰く、『魯論語』二十篇、『齊論語』別に「問王」・「知道」有り、凡そ二十二篇。其の二十篇中、章句頗る『魯論』より多し。『古論』孔子壁中に出ず。【「堯曰」下章「子張問う」を分ち、以て一篇と為す。両「子張」有り、凡そ二十一篇。篇次『齊魯論』と同じからず。】

凡そ書の、「孔氏壁中に出ず」と称する者は、皆妄謬なり。『古論』知るべし。「子壁」の「子」は、疑うらくは当に「氏」に作るべし。「問王」・「知道」も、蓋し亦妄謬ならん。

一般に書物で、「孔氏の壁中から出てきた」と言われるものは、すべてでたらめである。したがって『古論語』についても、それがでたらめな

ものであることがわかる。また朱子「論語序説」に何晏の序を引いて「孔子壁中」とあるが、「子」の字は、当然「氏」の字にするべきである。「古論語」のみならず、『齊論語』の「問王」と「知道」の二篇についても、思うにでたらめである。

程子曰く、『論語』の書、有子・曾子の門人に成る。故に其の書独り二子「子」を以て称す。

此れ必ずしも然らざる者なり。亦豈に他故無からんや。然れども不急の察なれば、論ぜずして可なり。

これは必ずしもそうではない。これが事実であるならば、いったいどうして有若と曾参を「有子・曾子」と呼んでいる以外の根拠がないことがあるのか。だがこれは急を要する考察ではないので、ここで論じなくてもさしつかえない。

程子曰く、『論語』を読むに、読み了りて全然事無き者有り。読み了りて後、其の中一兩句を得て喜ぶ者有り。読み了りて後、之を好むを知る者有り。読み了りて後、直ちに手の之に舞い、足の之を踏むを知らざる有る者有り。

程子曰く、今人書を読むを会せず。『論語』を読むが如き、未だ読まざる時、是れ此等の人。読み了りて後、又只是れ此等の人。便ち是れ曾て読まず。

程子曰く、頤十七八より『論語』を読む。当時已に文義を曉れり。之を読むこと愈いよ久しくして、但だ意味の深長なるを覚ゆ。

人は生まれながら知るに非ず、智識は年を逐い而して長ず。経書は義深く、而して伝註淆乱す。明睿の才有りと雖も、少年豈に能く了得せんや。窃かに恐らくは其れ十七八の曉る所は、文義必ず未だ悉さざる有り。然り而して徒に「意味深長」として、意是れ傳会して称賛すれば、往往にして文外に義を生ずる者なり。玩味の卮言、是に於いてか生ぜん。夫れ卮言は、或は後学の病を貽す。誠めざるべけんや。

人は生まれながらにして知っているのではなく、その知識は年を逐うごとに増えていくものである。経書の意味は深遠であり、そのためその注釈は入り乱れている。程子にすぐれた才能があったとは言うものの、一七、八歳の少年がどうしてその経書の意味を会得することができたであろうか。ひそかに思うに一七、八歳の少年が理解したところには、きっと意味を逐一理解していない点もあるだろう。このようにしてむやみに「意味深長である」として、意味をこじつけてはめはやせば、往々にして書かれてもない解釈を生み出すものである。経書の深読みによる勝手な解釈は、こうして生まれるのである。こうした勝手な解釈は、あるいは後学者に悪影響を与えるかもしれない。これを戒めなくてよからうか。

又按ずるに、孔門の高第弟子、唯だ曾子のみ年最も少し。而し



て其の易簣えきさいの時の事(26)、是の書に記載すれば、則ち其の論纂は、必ず孔子の歿後、四五十年の外に在り。子夏・子張の等、皆焉こゝに在らず、故に論纂せし者は、皆数伝の後学ならん。曾元・曾申の若き、其の中に在れば、自ずから曾子を「子」とせざるを得ず。況に孔子の後、曾子は蓋し教を主とし、而して門人最も多し。有子の若きは考うる所無し。程説まに泥むべからず、又廢すべからず。

さらに考ふるに、孔子の門下の優れた弟子のうち、曾子だけが年がずば抜けて若い。そしてその曾子の臨終の時のことが、『論語』に書かれている以上、『論語』が編纂されたのは、きっと孔子の歿後、四、五十年以上たつてからのことである。この頃は子夏・子張の輩も、みなこの世にはなく、したがって『論語』の編纂者は、みな孔子から何代かの子の後学者であろう。曾子の二人の息子、曾元・曾申などが、その編纂者の中にいたならば、おのずと曾子を「子」と称するはかなかつた。さらに孔子の後、曾子は思うに教育を重視し、門人が最も多かつた。有子などについては考察すべきものがない。程子の説には、当然こたわるべきではない。しかしまた消し去ってはいけない。

## 注

(1) 孔子の生れ月について、『史記』「孔子世家」には「十一月庚子」の記述はなく、『春秋公羊伝』「襄公二十一年」の伝に「十有一月庚子孔子生。」とある。『史記』がこれを「二十二年」としていることについて、『史記索隱』は「以周正十一月厲明年、故誤也。」とする。なお『春秋穀梁伝』「襄公二十一年」の伝には、「冬十月」以降の出来事として「庚子

孔子生。」とある。また日本名家本は「不足拠者」の下に句点が欠落している。

(2) 「墨子」「非儒下篇」に「孔丘之齊、見景公。景公説、欲封之以尼谿、以告晏子。晏子曰、不可。」とある。

(3) 「孔叢子」「詰墨篇」に、白公の事について、「白公立一年、然後乃謀作乱。乱作在哀公十六年秋也。夫子已卒十旬矣。」とある。また田常の事については、「孔子適齊、惡陳常、而終不見。常病之、亦惡孔子。交相惡、而又任事、其然矣。」および「陳常弑其君。孔子齋戒沐浴、而朝請討之。觀其終不樹子皮、審矣。」とある。ここで言う「陳常」とは「田常」のことである。

(4) 手稿本は「定公」の上に「魯」字を誤って付しているので、日本名家本はこれを削っている。

(5) 中華書局本は「季氏」の上に「而」字がある。

(6) 「公山弗擾」について、中華書局本は『史記』「孔子世家」にならつて、「公山不狃」としている。なお、『論語』「陽貨篇」では「公山弗擾」となっている。

(7) 『礼記』「檀弓上篇」に「夫子制於中都、四寸之棺、五寸之槨。以斯知不欲速朽也。昔者夫子失魯司寇、將之荆。蓋先之以子夏、又申之以冉有。以斯知不欲速貧也。」とある。

(8) 日本名家本は「辛丑」の下に句点が欠落しているので、ここでは手稿本にならつてこれを補った。

(9) 手稿本ならびに中華書局本には「困」字の下に句点はない。

(10) 履軒のこの説は『史記考証』に引く余有丁の説に拠っている。なお、『論語雕題』には「余有丁曰」としてこの説を紹介している。

(11) 日本名家本は、「已」字を「巳」字に誤っているので、ここではこれを訂正した。

(12) 日本名家本は、「輔相会礼」の四文字に返り点を付していないが、ここでは意味をとって「会礼を輔相す」と訓読した。

(13) 「荀子」「宥坐篇」に「孔子為魯撰相、朝七日而誅少正卯。門人進問曰、夫少正卯、魯之聞人也。夫子為政而始誅之得無失乎。孔子曰、居、吾語汝其故。人有惡者五、而盜竊不与焉。一曰心達而險、二曰行辟而堅、三

曰言偽而弁、四曰記醜而博、五曰順非而沢。此五者有一於人、則不得免於君子之誅。而少正卯兼有之。故居処足以聚徒成群、言談足以飾邪邪衆、強足以反是獨立。此小人之桀雄也。不可不誅也。」とある。なお「孔子家語」「始誅篇」にも少正卯に関する同様の記述が見られる。

- (14) 『晦庵集』卷六十七「舜典象刑説」に「若少正卯之事、則予嘗竊疑之。盖論語所不載、子思孟子所不言、雖以左氏春秋内外伝之誣且駁、而猶不道也。乃独荀况言之、是必齊魯陋儒憤聖人之失職、故為此説、以夸其權耳。吾又安敢輕信其言而遽稽以為決乎。聊并記之、以俟來者。」とある。
- (15) 中華書局本は、『史記』『孔子世家』にならって、「召孔子。孔子欲往亦不果。」としている。

- (16) 『史記索隱』は、「古者二十五家為里。」とあるが、履軒の『史記雕題』には、「古者二十四家為里。」とある。

- (17) 『周礼』『小司徒』の鄭玄の注に『司馬法』を引いて、「井十為通。」また、「通十為成。」とある。

- (18) 『史記』『孔子世家』には「魯哀公問政。対曰、政在選民。」とあるが、『論語』にこれに該当する文はない。また同じく「孔子世家」に「季康子問政。曰、拳直錯諸枉、則枉者直。」とあるが、『論語』には「季康子問政。」には「政者正也。子帥以正、孰敢不正。」(「顔淵篇」)と答え、「拳直錯諸枉。」は哀公が「何為則民服。」(「為政篇」)と問うた時の答えになっており、『論語』の文章が『史記』の中でやや交錯している。なお「孔子世家」はこの他、「季康子患盜、問於孔子。」(「顔淵篇」)の話も挙げている。

- (19) 中華書局本は「孔子壁中」ではなく「孔氏壁中」となっているが、履軒が底本としたと考えられる書林向錢堂熊存字精刻新版『四書集註』は、「孔子壁中」となっている。なお何晏『論語集解』『序』には「魯共王時、嘗欲以孔子宅為宮壞、得古文論語。」とある。

- (20) 『荀子』『天論篇』に「無用之尹、不急之察、棄而不治、若夫君臣之義、父子之親、夫婦之別、則日切磋而不舎也。」とある。

- (21) 中華書局本は三つ目の「誦了後」の「後」字があるが、手稿本では欠落しているので、日本名家本はこれを補っている。

- (22) 日本名家本は「有誦了後、直有不知手之舞之、足之蹈之者。」について

て、訓点の一部欠落しているので、ここでは和刻本『四書集註大全』(明胡広等奉勅編、清汪份編、吉村晋点、嘉永七年刊)の訓点に従って訓読した。

- (23) 『論語』『述而篇』に「子曰、我非生而知之者。好古敏以求之者也。」とある。

- (24) 『莊子』『寓言篇』に「寓言十九、重言十七、卮言日出、和以天倪。」とある。「卮言」とは臨機応変な言葉、自由自在な解釈、ひいては自分勝手な解釈のこと。

- (25) 曾子の臨終の場面として、『論語』『泰伯篇』に「曾子有疾。召門弟子曰、啓予足、啓予手。詩云、戰戰兢兢、如臨深淵、如履薄冰。而今而後、吾知免夫、小子。」とある。なお「易簣」については、『礼記』『檀弓上篇』に「童子」曰、華而睨大夫之簣与。曾子曰、然。斯季孫之賜也。我未之能易也。元起易簣。」とある。

- (26) 『漢書』『芸文志』に「門人相与輯而論纂。」とある。

- (27) 日本名家本は「不」字の下にレ点が欠落しているが、ここでは意味をとって訓読した。

#### 〈原文〉

#### 論語逢原

#### 集註序説

水哉館学

史記世家曰。孔子名丘。字仲尼。其先宋人。父叔梁紇。母顔氏。以魯襄公二十二年。庚戌之歲。十一月庚子。生孔子於魯昌平郷陬邑。為兒嬉戲。常陳俎豆。設礼容。

朱子不甚信史記。姑記載以備考耳。

此節。曰顔氏。曰十一月庚子。曰陳俎豆設礼容。皆後人之附益量度。其末無明徵。不足拠者。他多放此。

及長為委吏。料量平。為司職吏。畜蕃息。適周問礼於老子。既反而弟子益

進。

問禮。是老學家之虛誕。宜削去。  
昭公二十五年甲申。孔子年三十五。而昭公奔齊。魯亂。於是適齊。為高昭子家臣。以通乎景公。公欲封以尼谿之田。晏嬰不可。公惑之。孔子遂行。反乎魯。  
為家臣無徵。蓋虛云云。

尼谿之封。出于墨子。其言皆深詆譏孔子。至言與白公之謀。奉以石乞。助田常之逆。亂三國。此勿論誣孔子。亦厚誣晏子矣。孔叢子詰墨篇。弁此二事。頗明白。且云。白公作亂。在哀公十六年秋也。孔子卒已十旬矣。史記蓋本于墨子也。宜削去。

史記節摘論語之文。排布于篇中。蓋皆臆斷矣。非有所考。故往往失次。亦不足弁。

定公元年壬辰。孔子年四十三。季氏強僭。其臣陽虎作亂專政。故孔子不仕。而退脩詩書禮樂。弟子彌衆。

講明詩書禮樂。是孔子之恒事已。此特稱脩者。臆度不足拋。史遷之意。蓋謂退而講學而已。勿泥。不得與刪詩正樂相礙。

上文云。弟子益進。此又云。彌衆。並是臆度。無証左。  
九年庚子。孔子年五十一。公山弗擾以費畔季氏。召孔子。欲往而卒不行。定公以孔子為中都宰。一年四方則之。遂為司空。又為大司寇。

按戴記。有夫子制於中都之文。然未足以証焉。且既云宰。是家臣矣。非公臣。上下文不相屬。或是虛傳。

十年辛丑。相定公。會齊侯于夾谷。齊人婦魯侵地。十二年癸卯。使仲由為季氏宰。墮三都。收其甲兵。孟氏不肯墮成。圍之。不克。

按春秋傳。年表。魯世家。墮郕墮費。在于孔子行之前。而圍成。在于孔子行之後十二月。則此文謬爾。

十四年乙巳。孔子年五十六。撰行相事。誅少正卯。與聞國政。三月魯國大治。  
夾谷之會。孔子嘗為相。是輔相會禮而已。後人因作宰相之相。以誣焉。朱子曰。少正卯之事。論語不載。思孟不言。以春秋內外傳之誣駁。猶不道也。獨荀卿言之。蓋齊魯陋儒。憤聖人之失職。故為此說。以夸其權耳。

齊人婦女棄。以沮之。季桓子受之。郊又不致。臯婁於大夫。孔子行。適衛。主

於子路妻兄顏濁鄒家。適陳。過匡。匡人以為陽虎而拘之。既解還衛。主蘧伯玉家。見南子。去適宋。司馬桓魋欲殺之。又去適陳。主司城貞子家。居三歲。而反于衛。靈公不能用。晉趙氏家臣佛肸。以中牟畔。召孔子。欲往亦不果。將西見趙簡子。至河而反。

史記。至河而反。以鳴犢之事。此蓋意鳴犢之虛誕。而不載也。然至河。亦削之而可。

又主蘧伯玉家。靈公問陳。不對而行。復如陳。季桓子卒。遺言謂康子。必召孔子。其臣止之。康子乃召冉求。孔子如蔡及葉。楚昭王將以書社地封孔子。令尹子西不可。乃止。

按諸書。孔子足跡。未嘗至于楚也。書社之封。虛誕已。

以書社地封。是不成語。亦節略之失宜者。書社稱里居之良者也。乃承以里數。纔成文理耳。七百是書社里之數。非方七百里之謂。註無此理者。殆以為方七百里也。七百里。大抵方有六七千戶。其田以周制推之。一里給三井。為二千一百井矣。大抵二十成之田耳。非太多者。僅居方七百里七百分之一云。然事已虛誕。實不足弁者。

又反乎衛。時靈公已卒。衛君輒欲得孔子為政。而冉求為季氏將。與齊戰有功。康子乃召孔子。而孔子歸魯。夷哀公之十一年丁巳。而孔子年六十八矣。

然魯終不能用孔子。孔子亦不求仕。乃叙書傳禮記。刪詩正樂。序易象繫象說卦文言。

十翼傳皆非孔子之筆矣。序字誤。  
弟子蓋三千焉。身通六藝者。七十二人。

三千失於太汎。七十二失於太切。並傳說之不得實者。勿泥。  
十四年庚申。魯西狩獲麟。孔子作春秋。

麟無祚祥。尤與春秋無干係。此用春秋傳之說。不可從。  
明年辛酉。子路死於衛。十六年壬戌。四月己丑。孔子卒。年七十三。葬魯城北泗上。弟子皆服心喪三年而去。惟子貢廬於冢上。凡六年。孔子生鯉。字伯魚。先卒。伯魚生伋。字子思。作中庸。

何氏曰。魯論語二十篇。齊論語別有問王知道。凡二十二篇。其二十篇中。章句頗多於魯論。古論出孔子壁中。分堯曰下章子張問。以為一篇。有兩子張。凡二十二篇。篇次不與齊魯論同。

凡書。稱出孔氏壁中者。皆妄謬。古論可知矣。子壁之子。疑當作氏。問王

知道。蓋亦妄謬。

程子曰。論語之書。成於有子曾子之門人。故其書独二子以子称。

此不必然者。亦豈無他故哉。然不急之察。不論可也。

程子曰。誦論語。有誦了全然無事者。有誦了後。其中得一兩句喜者。有誦了後。知好之者。有誦了後。直有不知手之舞之。足之蹈之者。

程子曰。今人不会誦書。如誦論語。未誦時。是此等人。誦了後。又只是此等人。便是不曾誦。

程子曰。願自十七八誦論語。當時已曉文義。誦之愈久。但覺意味深長。

人非生知。智識逐年而長。經書義深。而伝註淆乱。雖有明睿之才。少年豈能了得焉。窃恐其十七八所曉。文義必有未悉也。然而徒意味深長矣。意是傳会称赞。往往文外生義者。玩味之卮言。於是乎生焉。夫卮言。或貽後學之病。可不識哉。

又按。孔門高第弟子。唯曾子年最少。而其易簣時事。記載于是書。則其論纂。必在孔子歿後。四五十年外。子夏子張之等。皆不在焉。故論纂者。皆數伝後學矣。若曾元曾申。在其中。自不得弗子曾子也。況孔子之後。曾子蓋主教。而門人最多乎。若有子無所考也。程說不当泥。又不可廢。

#### 付記

本稿は平成15年度に、大阪大学文学部において担当した「中国化学演習」の成果の一部である。受講生は池田光子(D3)、黒田秀教(D1)、上野洋子(M2)、村上奈月(4回生)、齋明鶴(4回生)、松田祐樹(3回生)、村田誠治(2回生)の計7名である。

## The Translation and Annotation of *Rongohogen*

Hiroko KUME

### Abstract

Riken Nakai (1732-1817) was a leading Confucian of the Kaitokudo School. *Rongohogen*, his annotation of the Analects of Confucius, is his masterpiece. In this paper, I translate his introduction to *Rongohogen* into modern Japanese and annotate it.

It is true that Riken's interpretation of the Analects of Confucius is based on Chu Hsi's work, *Lunyüchichu*. In his annotation, however, Riken criticizes Chu Hsi's understanding, and proposes his own views. In order to contrast Chu Hsi's and Riken's understanding, this paper puts, into Riken's texts in *Rongohogen*, some of Chu Hsi's corresponding texts from *Lunyüchichu*.

This paper also includes Riken's original texts of the introduction to *Rongohogen*.

**Keywords:** Kaitokudo School, Riken Nakai, *Rongohogen*, Chu Hsi, *Lunyüchichu*